

「あなた」の立ち現れなさをめぐって ——人称的世界の成立とその応答的基盤を問いなおす——

高橋 賢次

1. はじめに

「他者が現れる／他者と出会う」とはいかなる経験／出来事であろうか。E.フッサールが「他者」の存在を超越論的な問いに付して以来、現象学においては「他者の現れ」それ自体が一箇の主題とされ、その内的機制の解明が試みられてきた。たとえば、M.メルロ＝ポンティが切り拓いた発生論的な方向性においては、身体や生命のうちに自他未分の癒合性を見出すことによって、他者との交通可能性が論じられる一方、E.レヴィナスに代表されるある種の論脈においては、自他未分の次元には還元できない「絶対的な他者性」を賭け金とするかたちで、他者の「現れなさ」が強調されてきたと言えよう。とりわけ後者の文脈においては、他者は「汝」や「あなた」と呼ばれる二人称的な存在とみなされ、ときに「倫理的に」語られてきた。

これに対し、社会学や人類学の領域に目を向けると、「他者の現れ」や「他者との出会い」といった主題は、もっぱら相互作用論の文脈で論じられてきたように思われる。「出会い」という主題を社会学的研究の俎上に乗せたのはE.ゴフマンであるが、彼が描いたのはつねにすでに何らかの仕方で「他者と出合っている」世界であり、そこに「他者はいかにして現れるか」といった現象学的な問題意識を差し挟む余地はない¹。

このように、現象学と社会学はともに人々の経験世界への接近を志向しながらも、「他者の現れ」や「他者との出会い」をめぐって対照的な道を歩んできたように見える。

一方で、「他者の現れ」をめぐって理論的／学説的に精緻化された現象学的研究は、経験的な研究に多くの手がかりをもたらしたが、その反面、「他者の現れ」それ自体を原理的に追究すればするほど、事象そのものへ立ち帰ろうとする現象学的な動機づけに反するかのよう、「他者の現れ」や「他者との出会い」をめぐる個別具体的な経験／出来事の頭上を、どこか通り越してしまったようにも思える。

¹ たとえば近年では、木村大治らがゴフマンの議論を引き継いで「出会い」をめぐる研究を展開しているが、そこでいう「出会い」とは、相互行為の端緒において「他者のふるまい」の偶有性／不確定性が露出する「特異点」であり、他者が志向的な存在として現れていることは議論の前提に置かれている（木村・花村 2021）。ゴフマン自身は「非人格 non-person」という概念によって、その場に存在しながら「相互行為の相手」（社会的対象）とはみなされず、あたかも物（物理的対象／非社会的対象）のように扱われる人々について言及しているものの、彼は「非人格」についてそれ以上主題的に論じなかった（Goffman, 1963=1980, 1967=2002）。関水徹平は「社会的死」をめぐる議論において、「社会的対象」の基底的な要件をA.シュッツのいう「他者定位」（独自の意識の流れをもつ存在として相手に志向すること）として定義し、その社会的な線引き過程を分析していく方向性を示している（関水 2009）。本稿は「他者定位」なるものの内実とその文脈依存性をより詳細に追究しようとする点で、こうした方向性を共有するものである。

他方で、「出会い」をめぐる社会的／人類学的研究は、個々の相互作用場面の経験的な記述に専念することによって、相互作用秩序がそのつどの文脈の中で遂行的に「達成」されていく様子を丹念に描いてきたと言えるが、「相互作用秩序の成立機序」に焦点化することによって、相互作用秩序の成否には還元できない他者の「現れなさ」や他者との「出会えなさ」の感覚を、決定的に捉え損なってきたのではないだろうか。

これに対し、あくまでも個別具体的な経験／出来事の水準で「他者の現れ」や「他者との出会い」を主題化するためには、現象学的な問題関心とその知的成果を、何らかのかたちで経験的な記述に接合する必要があるはずだ。そこで本稿では、経験的研究に向けた予備的作業として、「他者の現れ」や「他者との出会い」を経験的に記述することがどのような営みなのか、その記述上の「賭け金」の所在について、おもに理論的な観点から方法的な視座を提起してみたい。

そのために、以下ではまず、現象学における他者問題の展開を問題構制や論理構成に着目しながら批判的に振り返ることによって、その成果と残された課題を明らかにしていく。

2. 現象学における他者問題の展開——「独我論」という軌

(1) アポリアとしての「他者問題」の発見

他者の現れをめぐる現象学的な議論の出発点となったのは、E.フッサールが『デカルト的省察』で展開した他我構成論であり、端的に言えばそれは、超越論的主観性の領野において、いかにして「もうひとつの超越論的主観」としての「他我 alter ego」が現れうるか、という問題であった（Husserl, [1931] 1977=2002）。この問いに答えるべく展開された他我構成論は、図式的に言えば、「超越論的主観性の領野に現れる自らの身体によく似た〈もう一つの身体〉に自己移入=感情移入することで〈他我〉が構成される」というものであったが、周知のとおり、こうした理論構成に対しては、「自己移入=感情移入によって構成された他我は自我の類同物／志向性変様にすぎず、本来証示されるべき他我の等根源性が失われている」といった批判が、これまで幾度となく繰り返されてきた（鷺田 1995）。

このように、フッサールの他我構成論は、「他者はいかにして立ち現れるか」という問いの賭け金が他者の等根源性にあることを明示するものであったが、同時に、「構成する主観たる超越論的主観性から出発して、他我の構成を論じる」という自我論的な問題構制を採ったことで、等根源性をもった他我の現れを説明できないというアポリアを抱え込むものであった。

(2) 発生論的現象学における「解決」

これに対して、フッサールが「構成する主観」としての意識を出発点に据えた点を批

判し、意識以前の身体の次元に照準することによって、自我論的な問題構制を乗り越えようとしたのが、M.メルロ=ポンティである。

メルロ=ポンティにとって身体とは、なによりもまず、世界を対象化的に把握しようとする意識や能動的な知覚・運動に先立って、つねにすでに受動的に世界を知覚している存在である。「私は、ひとが私のなかで知覚するのであって、私が知覚するのではない」(Merleau-Ponty, 1945=1974: 21) [強調は原文] という一文が示すように、「わたし」という人称的な意識主観は、メルロ=ポンティが「ひと On」と呼ぶ前人称的で無名的／匿名的 *anonyme* な知覚の担い手によって、つねにすでに先立たれている。身体とは、運動と知覚の緊密な絡まり合いの中で、「知覚する主体」と「知覚される対象」が同時相即的に分岐する「場」のようなものであり、「わたし」という人称性をもった意識主観は、受肉された知覚の場としての身体から「図」として浮かび上がるものである。

このように、メルロ=ポンティは「わたし」という人称的な意識に先立つ身体の次元に立ち帰ることで、「身体／意識」「主観／客観」「自己／他者」といった二分法が、いずれも身体に根を持つことを記述的に明らかにしていった。たとえば、「哲学者とその影」(1959)においては、感情移入の問題が皮膚感覺的な直覚的知覚の水準に定位され、「私の手と他者の手の入れ替わり」のような知覚における人称の交互交替性の機制や、「他者のまなざし」の共知覚の機制が論じられるとともに、その基底的な基盤として、自我と他我が「同じ一つの間身体性の器官 *intercorporéité*」となってひとつの「系／システム」を形成していることが指摘されている (Merleau-Ponty, 1960=1970 2: 17-21)。

また、メルロ=ポンティは、フッサールの超越論的主観性の孤独に対し、より根源的な孤独は自他未分の「無人称的な生の濃霧でしかない」と述べ、人称分化以前の間主観的生は別の間主観的な生と数的な区別を持たない、と指摘している。自我と他我は、個体化以前の自他未分の状態から脱中心化的に分化してくるものであり、自我のうちには他者の身体知覚があらかじめ「含有」されている (Merleau-Ponty, 1960=1970 2: 27-31)。こうした記述を経験的に裏付けるかのように、メルロ=ポンティは「幼児の対人関係」や「意識と言語の獲得」講義において、自己と世界や自己と他者が未分化な癒合的状态から、幼児が世界知覚と他者知覚を身につけていく過程を論じていった (Merleau-Ponty, 1953=1966, 1988=1993)。

人称的な意識主観としての「わたし」の存立には、つねにすでに他者の存在が織り込まれているのであって、フッサールが現象学的還元の原点に据えた「超越論的主観性」なるものは、メルロ=ポンティにとっては「生きられた身体」の忘却のうえに仮構されたものにすぎない。このように、メルロ=ポンティの現象学的な身体論は、あらゆる自他関係の発生の基底に自他未分の前人称的・匿名的な身体を据えることによって、自他間の交通可能性を拓くものであり、意識を出発点とする自我論的な問題構制そのものを転覆させ、フッサールが提起した他者問題を乗り越えようとするものであった。

(3) 発生論的現象学の社会学的援用

このような発生論的な現象学の知見は、社会学においても積極的に援用されている。たとえば西原和久は、彼のいう「発生論的社会学」の理論構築において、主観的行為者としての個人を前提とする社会的な間主観性論に対し、社会的世界の構成を、「間身体性」や「間身体性」といった自他未分の次元から、「間主体性」や「間主観性」といった諸位相が重層的に発生していくプロセスとして描いている（西原 2003）。N.クロスリーも同様に、間主観性を「根源的間主観性」や「自我論的間主観性」、「具体的な間主観性」といった諸層に分節化し、前者から後者が重層的に発生していくと論じている（Crossley, 1996=2003）。

このような発生論的な理論構築の特徴は、メルロ=ポンティが主題化した自他未分の次元が、独我論や個体主義的発想の「回避」や「克服」というねらいのもとで、社会的世界の基底に基礎づけ主義的に導入されている点にある。たとえばクロスリーは、自身の研究上の視点を説明するにあたって、フッサール現象学の「独我論的な」理論構成の問題点を指摘し、独我論から間主観性への展開が必要であると論じている。彼はフッサールの自我論的な問題構制・理論構成に対し、根源的な共同性を論じるためには、「言語」を用いたコミュニケーションに照準することによって、これを乗り越えるべきだと主張する（Crossley, 1996=2003: 19-31）。これに対し、西原は自身の理論構成の出発点をA.シュッツの社会理論に求めつつ、シュッツが視野に収めながらも十分に掘り下げられなかった身体性の次元へと理論的な拡張を図っているが、そうした企図の背後には、「個体以前」の関係性の次元に着目することで、シュッツの議論に含まれる個体主義的な発想を発展的に乗り越えようとするねらいがある（西原 1998, 2003）。

両者に共通するのは、自己と他者をあらかじめ分離／断絶したものとみなす独我論的／個体主義的な発想を退けようとする姿勢であり、発生論的な社会学もまた、自他未分の関係性の次元を基礎づけ主義的に導入することによって、自己-他者の断絶をもたらす独我論を克服し、関係論的な視座から自我論的な問題構制を乗り越えようとする点で、メルロ=ポンティによるフッサール批判と同型的な論理構成を踏襲している。

(4) 発生論的な「解決」とは何だったのか

こうした発生論の視座においては、フッサールが直面した他者問題のアポリアは、自我論的な問題構制が作り出した疑似問題／錯覚にすぎず、発生論的な問題構制に転換することによって回避しうるかのように論じられる。言い換えれば、発生論の視座に依拠するなら、自他未分の癒合性の次元においてつねにすでに「他者は現れている／他者と出会っている」のであって、独我論的なリアリティに囚われようと、原初的な身体性の次元に立ち返りさえすれば、「他者は現れうる／他者と出会う」ことになる。

ただし、メルロ=ポンティ自身は、こうした発生論による「解決」に対して、自他未分の匿名的／非人称的な次元を繰り返すことによって〈自我〉と〈他我〉を水平化し、

消失させてしまうのではないか (Merleau-Ponty, 1945=1974 2: 221-222) と懸念を表明している。ここから彼は、それまでの議論から一転して「他者の知解不可能性」を強調し、「他者知覚の困難のすべてが客観的思考に起因するわけでもなければ、その困難のすべてが行動の発見とともに解消されるわけでもない」(Merleau-Ponty, 1945=1974 2: 223) と、独我論的な問題次元の解消不可能性を主張する。このように、メルロ=ポンティは自他未分の癒合性を強調する一方で、自己-他者の人称区分が成立している地点において、「他者が知解不可能な存在として現れる」というリアリティが乗り越え難いものであることを、「生きられた独我論」として論じている (Merleau-Ponty, 1945=1974 2: 224-225)。

しかしながら、こうした指摘にもかかわらず、メルロ=ポンティは、われわれがこうした事態を独我論として意識可能なのは、自他未分の身体がつねにすでに世界に内属しているからだ、と結論づける。松葉祥一は、こうした論述においてメルロ=ポンティが「〈生きられた独我論〉を、知覚的・前人称的地平の上に基礎づけることによって両者の調停を図っている」(松葉 2010: 35) とし、私と他者を無記名な主観に還元し、自他の区別のない「集合意識」へと問題を「解消」しただけであって、自他未分化の「ひと On」の知覚経験の地平から、いかにして独我論的な主体が分化してくるのかを主題的に論じなかったために、「なぜ他者が不可能ではないかということを理解させてくれても、なぜ他者が可能かについては不問に付している」(松葉 2010: 36) と指摘している。廣松渉もまた、メルロ=ポンティが自他未分の癒合性の次元において、自他の行動が「対」を成していることを強調しながらも、実践的な行動連関のなかで自己と他者が人称的に分節化していく機制を十分に論じなかったために、自己と他者が「間身体性」や「肉 chair」において「合一」するような「合主体性論」にとどまったと批判している (廣松・港道 1983)。これらの指摘はいずれも、メルロ=ポンティが自他の人称分化の過程を十分に論じなかったために、「生きられた独我論」の地平を自他未分の次元に「還元」するような議論に陥っていると批判するものである。

たしかに、自他未分の癒合性の次元を強調する発生論の論理構成は、意識を出発点とする自我論的な問題構制を批判する点で一定の意義を持っているが、「独我論の回避／克服」を企図するあまり、基礎づけ主義的／還元論的な議論に陥る可能性がある。この点で、発生論の論理構成は、フッサールが直面したアポリアを「誤った問題構制が生み出した疑似問題」であるかのように位置づけることで、他者問題を「解決」というよりも、むしろ「解消／脱問題化」しかねないものであったと言えよう。

上述のとおり、発生論的な現象学は、「他者の現れ」をめぐる問題構制を「自他未分の状態から、いかにして自己-他者が人称的に分化していくか」という人称分化の問題へと転換していくものであった。したがって、他者問題の発生論的な「解決」の功罪を見極めるためには、人称分化をめぐる議論において、「他者の現れ」がどのように論じられてきたのかを振り返る必要がある。そこで以下では、人称分化の過程やその成立機

序をめぐる発生論および発達論的な説明を概観し、その問題点について検討してみたい²。

3. 人称分化をめぐる発生論／発達論的説明

(1) 二重感覚と鏡像段階——人称分化の身体的起源

前章で見てきたように、発生論が出発点に据えるのは、原初的な「母子関係」としてイメージされるような自他未分の癒合的状态である。この状態においては、「私」と「私でないもの＝他なるもの」が弁別されておらず、自己と他者、自己と世界とが混淆しているとされる（市川[1984]1993：10）。H.ワロンはこの段階を「胎児段階」と呼び、「ほぼ完全な同化の相」にあると指摘する。この段階における胎児は母体に生物学的に完全に依存しており、「欲求」が生起する間もなく即時的に満たされるような関係にあるという（浜田編訳1992：233-234）。

こうした癒合的状态の最初の「破れ」が「出産」であり、幼児はここで最初の原初的分離を被るが、この時点の幼児は、いまだ刺激や知覚や原初の情動が渾然一体となった世界との癒着的状态にある。メルロ＝ポンティによれば、身体の運動性の発達にともない、自己の身体の知覚と環境世界の知覚を結びつける「身体図式」が整備されることによって、幼児期の原初的な癒合的状态は、徐々に自己と世界、自己と他者とが分化した状態へと移行していく（Merleau-Ponty, 1953=1966）。

このような分化過程の端緒とされるのが、身体に生起する二重感覚である。市川によれば、「身体に触れる」ことによって、癒合的状态にある身体に「さわる-さわられる」という「能動-受動」の分裂が導入され、原初的な身体図式が成立する（市川1992）。このような触覚的な分化が、未だ癒合性の残滓をひきずっているのに対し、メルロ＝ポンティは、さらなる人称分化を導くためには自己の身体像の知覚が必要であるとし、幼児における鏡像的段階の重要性を強調する。それによると、幼児は鏡をとおしてはじめて「自己の身体」というものの表象あるいは視覚像を獲得し、「自分が自分自身にも他人にも見えるものだということ」に気づくのだという（Merleau-Ponty, 1953=1966）。

こうした議論に加えて、発達論においては、身体レベルにおける知覚的／情動的な共同性や一体性が人称分化の過程を支えていることが論じられている。浜田寿美男によれば、人間の身体は「出会った身体どうしがたがいに同じような姿形をとってしまうこと」（浜田1999：107）という「同型性」を本源的に備えており、同型性にもとづく他者の無意識的な同調から、意識的な模倣を経て、「能動-受動」のような相補的なやりとりが可能になるにつれて、徐々に自己と他者が分節化していくという（浜田1999）。

² 人称分化の発生／発達メカニズムを包括的かつ仔細に検討することは、本稿の分量および報告者の力量をゆうに超え出るため、以降の論述では論理構成や理論構成の水準に焦点を絞り、あくまでも理論的な観点から、その問題点を指摘するにとどめたい。

(2) 言語の獲得と人称関係の「一般化」

以上のように、人称分化の発生／発達、身体の同型性に支えられながら、二重感覚や鏡像段階といった触覚的・視覚的な「触発」を契機として進行していくが、さらにそれを推し進めるのが、幼児における言語の獲得／言語活動への参入である。

多くの発達論的知見が示しているように、幼児の言語活動は間身体的で情動的な「共鳴」や「共振」に根ざしており、言語の習得もまた、身体の同型性を基礎とする間身体的／間主体的な交流のなかで行われる。幼児は「泣き声」のような「声」の次元から、周囲の他者たちとの情動的な応答関係に組み込まれており、間身体的な「共振」や「模倣」から「指差し」のような環境世界を媒介した交流を経て、幼児が発する多型的な喃語は、リズムやアクセント、抑揚といったレベルから、〈身分け〉された意味世界／言語活動の世界に適合的なかたちへと形態化／組織化されていく（やまだ 2010; 浜田 1999; Merleau-Ponty, 1988=1993）。

G.H.ミードが指摘したように、言語を介して共有された意味の世界に参入することは、「他我」の成立とその「一般化」を導く。言語の習得は、発話主体に「内的発話空間」としての「精神」を創設するとともに、言葉が他者に引き起こす反応を先取りすることによって、「他者の立場に立つ」という役割取得を可能にする。ミードによれば、「他なる精神」としての他我の認識は精神や自我の確立によってはじめて可能になると同時に、役割取得の拡大・進展によって、個別の他者の反応から相対的に自律した「一般化された他者」が形成されていくのだという（Mead, 1934=1973）。

以上のように、言語の習得は、二人称的な存在としての「他我」の認識を確立するだけでなく、個別具体的な他者から遊離した三人称的な存在としての「一般化された他者」の形成を可能にするものである。

(3) 社会学基礎理論における人称論の展開

このような人称分化の発生論／発達論的認識は、社会的世界の基底をなすものとして、社会学の基礎理論のうちにも見出すことができる。たとえば宮台真司は、社会的世界において「あらゆる行為が誰の行為であるか決まっている」という事実に向け、こうした行為帰属の了解を支えている「人称図式」の成立について、以下のような分析を行っている（宮台 1985）。

まず、ある覚識主体にとっての知覚世界の内部に³ 先天的に〈他者〉（原二人称）が埋め込まれており³、この〈他者〉によって覚識主体の内部に「人称／無人称」の区別が生じるとともに、〈他者〉の〈他者〉としての「自己」（前一人称）の原型が形成される。この「自己」の形成と相即して、「原二人称」としての〈他者〉は、「自己」にとっての「他者」（前二人称）へと変換され、「無人称」に対置される「人称」領域内において、

³ 宮台はその傍証として、人の顔に対する新生児の反応を挙げている（宮台 1985）。

「自己」（前一人称）と「他者」（前二人称）が分化してくるようになる。

このような「自己」と「他者」の分化は、「〈他者の予期〉の予期」という予期能力の萌芽をもたらす。宮台は、個体の認知的発達をめぐるピアジェの議論に依拠して、対象の永続性の理解が成立することで、知覚世界が「いまここ」の直接性から時空間的に拡張されるとともに、「現前しない他者」の理解が可能になると論じる。ここにおいて、「いまここ」に現前する「他者」（前二人称）と「いまここ」に現前しない「不在の他者」が区別され、やがて「不在の他者」は「可能的他者」として「三人称」を構成するようになる。

こうした直接的な知覚世界の時空間的な拡張や「不在の他者＝可能的他者」の知覚を支えているものが、言語による指示作用である。言語は「いまここ」にない不在の対象を示すものであり、宮台はこうした言語世界への参入によって、「一人称／二人称／三人称」の座標関係の理解や個々の他者の現前に依らない「情況貫通的な自己把握」が完成するとともに、可能的他者の拡張によって「任意第三者の予期・の予期」——ミードのいう「一般化された他者」——が成立するという（宮台 1985）。

人称分化の起点を「自他未分の癒合的状态」に据えるか、それとも宮台のように何らかの先天的な〈他者〉（原二人称）の存在を前提とするかという点で違いはあるものの、日常的な人称区分から「前人称」の次元に遡り、そこから「一人称／二人称／三人称」というわれわれがよく知る人称区分の成立を論じる点で、人称図式論もまた発生論的な論理構成を採っている⁴。

4. 「発生」から「生成」へ——基礎づけ主義からの脱却

以上のように、人称分化をめぐる発生論／発達論的説明においては、自他の区別のない前人称的な癒合的状态から出発し、身体的な相互交流に支えられながら、「ふれる-ふれられる」「まなざす-まなざされる」「呼びかける-呼びかけられる」といった触発的な契機をつうじて、自己と他者とが徐々に人称的に分化していく様子が語られている。こうした議論には、人称分化の可能性の条件を明らかにした点で、一定の意義がある。

本稿は、上記のような発生論／発達論の個々の知見について、その妥当性を吟味するものではないが、しかしながら、発生論／発達論的な説明は、以下に指摘するいくつかの論理構成上の問題ゆえに、「他者の現れ」や「他者との出会い」をめぐる個別具体的な経験／出来事を、なかば必然的に捉え損なう可能性がある。

⁴ 発生論的な現象学と社会学は人称分化にかんして同型的な論理構成を採っているが、そこには力点の違いが見受けられる。すなわち、現象学がもっぱら「二人称」としての他者の立ち現れを問題にしているのに対して、社会学は「二人称」としての他者の現れをあるいど前提として、抽象的な規範の準拠点となる「三人称」の他者の成立に焦点を当てる傾向がある。

(1) 交流可能性を欠いた身体との出会い

前章で見たように、人称分化をめぐる発生論／発達論的説明においては、自他未分の癒合的状态が出発点に置かれ、「身体の同型性」やそれにもとづく交流可能性がつねにすでに担保されているかのように議論が展開されている。しかしながら、「同調」や「共振」といった間身体性レベルでの共同性や一体性が強調されればされるほど、同型性を持たない異質な身体や知覚的・情動的な交流可能性を欠いた身体との出会いの可能性が捨象されてしまうおそれがある。

もしかりに、発生論や発達論が指摘するように、あらゆる自他関係の根底に「身体の同型性」にもとづく交流が存在するのであれば、そうした前提を欠いたとき、われわれは他者と出会えないはずである。しかしながら、いくつかの現象学的研究が示すように、「身体の同型性」にもとづく交流可能性が担保されていない場合であっても、一定の状況や文脈のもとで、なお「他者の現れ」や「他者との出会い」は成立しうる。

たとえば、植物状態の患者のように、日常的な相互行為はもちろん、身体的な交流可能性が閉ざされているように見える場合であっても、一定のかかわりにおいて、何らかのかたちで「他者と出会っている」と言えるような経験／出来事は浮上しうる(西村2001)。また、村上靖彦がALS患者へのケア場面から論じたように、患者の身体が言語的／非言語的なコミュニケーション手段を欠いていたとしても、その身体の「物質性」がかぎりなく露出することによって、日常的なコミュニケーションとは異なる「コンタクト」が開かれることもあるだろう(村上2014)。

こうした事態は、病や怪我、障害をめぐる経験のように、「身体の同型性」が担保されえない場面でしばしば顕在化するものであり、極限的には、生者と同じような仕方では身体的に現れない他者——胎児のように「いまだ現れない他者」や、死者のように「もう現れない他者」——とのかかわりにおいて浮上するはずである。われわれの経験的世界において、発生論や発達論が前提とするような「身体の同型性」にもとづく交流可能性がつねに担保されているとはかぎらないのであって、そうした場面においてもなお、「他者が現れうる／他者と出会う」のだとすれば、それはいかにして可能なのかか問われなければならない。

(2) 「定型発達」の規範化と「正常／異常」二分法の再生産

また、「反省によって反省以前に遡ることはできない」という限界ゆえに、発生論は、経験的に観察された事実から発生過程を遡及的に再構成するかたちをとるが、多くの場合、そこではいわゆる「定型発達」のケースにもとづいて発生／発達が語られる。これに対し、精神病理や発達障害のケースが参照される場合でも、それらが「病理」や「例外」とみなされるかぎり、「定型発達」を不用意に規範化することで、「定型／非定型」や「正常／異常」といった二分法を再生産してしまう可能性がある。

たとえば、村上靖彦は、自閉症児の経験世界の現象学的探求において、「経験構造の

多元性」という観点を導入することで、「一方通行的な階層構造」を発生論的にモデル化することを批判し、「定型発達」を「発達過程におけるマジョリティを指すフィクショナルな概念」として位置付けている（村上 2007）。こうした主張は、「定型発達」という概念を相対化し、「定型／非定型」という二分法を問いなおすもののように見えるが、しかし、自閉症児の体験世界の特徴を「視線触発の弱さ」から説明しようとする村上の議論は、還元論的な議論に陥ることによって、かえって「定型／非定型」という二分法を再生してしまうおそれがある。

これに対して、國分功一郎は、自閉症者の体験世界の特徴は「視線触発の弱さ」に還元できるものではなく、「同じ知覚・経験構造をもった類似的他者との出会いの少なさ」にあると論じている（國分 2019）。また、熊谷晋一郎が指摘するように、今日「発達障害」と呼ばれているものは、当人の知覚特性のみに還元できるものではなく、「定型発達」向けに整備された社会的環境やコミュニケーションスタイルとの「齟齬」から生じるものである（熊谷 2020）。

たしかに、「他者の現れ」や「他者との出会い」を考える際に、個々人がもつ知覚特性や経験構造の多元性を捉えることは必要不可欠であるが、それらは他者や環境世界とのかかわりの中で形成され、一定の状況や文脈のなかで現働化するものであって、個々の身体のみに帰属しうるものではない。それゆえに、「他者の現れ」や「他者との出会い」をめぐる経験に接近していくためには、個々人の体験世界の組織化／構造化のありようをその文脈を含めて捉えなおすことで、「定型／非定型」「正常／異常」といった二分法を解体していくことが求められるはずである。

(3) 文脈性の欠落

以上の指摘と部分的に重なるが、発生論的な論理構成に内在的な問題として、人称分化の発生／発達過程が線形的で不可逆的なものとみなされることで、その文脈依存性が看過されてしまう可能性がある。

これまで見てきたように、発生論や発達論は、自他未分の癒合的状态から自他の区分が徐々に分節化されていく線形的で不可逆的なプロセスであるかのように、人称分化の過程を描いている。かりに実際の人称分化のプロセスにおいて、非線形的で可逆的な変化が生じたとしても、それらが「病理」や「退行」として語られるかぎり、そこでは依然として人称分化を線形的で不可逆的なプロセスとして捉える認識が維持されている。

しかしながら、前章でみてきたように、自他の人称的な分節化が一定の間身体的なやりとりで支えられているのだとすれば、その内実に応じて、人称分化のありようも変化するはずである。人称分化の発生論／発達論は、人称性を持たない状態を起点とし、われわれがよく知る「一人称／二人称／三人称」という人称区分の成立を到達点とする理路を採るが、実際には、人称的な分節化が線形的／不可逆的に進行する保証はなく、人称図式が安定的に作動するともかぎらない。

たとえば、こうした人称の不安定性や偶有性に着目したものとして、山本史華の人称論がある。山本は、言語・死・コミュニケーションという領域においてこれまで展開されてきた人称論に対し、「人称が生成することを人の成長過程と併せて考えている点、つまり一回性の出来事として捉えてしまっている点」(山本 2006: 22)〔強調は原文〕を批判している。なぜなら、特定の起源をもち不可逆的なプロセスを表す「発生」的な視座に依拠するかぎり、人称がいまここで生成／消滅することを説明できないからである(山本 2006: 23)。

こうした「発生」的な認識に対して、山本は「発生した私は、所与のものとして存在するのではないのではないか。それはあたかも明滅する星のように、何度でも生成／消滅を繰り返すものなのではないだろうか」(山本 2006: 22)〔強調は原文〕と述べている。ここで彼が提起しているのは、特定の起源をもたず、いつでもどこでも生成／消滅するものとして人称を捉える「生成」論的な視座である。藤谷秀がいうように、そもそも人称とは、「自己」や「他者」とは異なり、「あなた」と呼びかけあう応答的なやりとりに内属するとき、はじめて意味をもつものである(藤谷 2001)。したがって、体験世界の人称的な分節化は無条件に成り立つものではなく、そのつどの関係性のあり方に応じて文脈依存的に「生成／消滅」するものとして捉える必要がある(山本 2006; 藤谷 2001; 坂部 2005)。

このように、「わたし」や「あなた」といった人称区分が応答的な関係の上に成り立っている以上、そうした応答的な基盤が何らかの仕方で揺らいでしまうような状況においては、上述のような人称区分もまた不安定にならざるをえない。

たとえば、斎藤環は、人称関係の安定的な成立には、自我の時空間的なまとまりや一貫性と関係性のパースペクティブの安定が必要不可欠であるとし、こうした人称区分が定立されていない例として、綾屋紗月の体験世界を参照している(斎藤 2019)。そこでは、身体に到来するバラバラな感覚情報をうまくまとめあげることができず、一人称としての「わたし」を構成する「身体的なまとまり」を維持することが困難になっているだけでなく、体験世界に現れるさまざまな事物に容易に同一化してしまうことから、体験世界は「パースペクティブを欠いた三人称的世界」として現出する(綾屋 2010, 2013)

5。

このように、体験世界の人称的な分節化や構造化が一定の身体的な相互作用のうえに

⁵ いわゆる「発達障害」の体験世界でなくとも、一人称としての「わたし」が成立しがたくなることは、さまざまな場面で生じうる。たとえば村瀬学は、妊娠経験を綴ったある手記の中から、「わたし」という言葉がうまく使えなくなったというエピソードを見出している。そこで語られているのは、自分の中に宿った存在に「あなた」と呼びかけ、話しかけていくうちに、「わたし」という一人称が喚起する「自己完結的な個体」のイメージが、「あなた」をその身に宿しているという実感にそぐわなくなっていく経験である。村瀬はこうした経験に着想を得て、「あなた」という言葉に特定の個人に還元されない「いのちの流れ」を指す「世代人称」としての含意がある、と論じている(村瀬 2010)。このような経験は綾屋における「わたし」の成立しがたさとは異なるものであるが、両者はいずれも、人稱的な分節化が文脈に応じて成立する偶有的なものであることを示している。

はじめて成立する以上、それらは線形的・不可逆的に「発生／発達」というよりも、他者や環境世界とのかかわりを含むそのつどの文脈の中で、「生成／消滅」するものとして捉える必要がある。わたしたちが生きる経験的な現実には、必ずしも「一人称／二人称／三人称」といった人称図式によって整然と分節化されているとはかぎらず、かりにそうした図式が分節化されていたとしても、いまここで／誰（何）が「一人称」や「二人称」として現れるか（現れないか）は、そのつどの文脈の中ではじめて確定される。

発生論や発達論は、「他者の現れ」や「他者との出会い」について、その可能性の条件を特定するものではあっても、個々の文脈における「他者の現れ」や「他者との出会い」を保証したり、基礎づけたりするものではありえない。この点で、人称分化にかんする発生論／発達論的説明が基礎づけ主義的な議論に終始するかぎり、「他者の現れ」や「他者との出会い」が文脈依存的に成立する偶有的な経験／出来事であるということを、決定的に捉え損なってしまうだろう。

5. 「応答」と「文脈」

本論ではこれまで、現象学における他者問題の発生論的な展開を辿りながら、人称分化の発生論／発達論的な説明に対して、人称的な分節化が応答的なやりとりを支えられ、そのつど文脈依存的に「生成／消滅」するものであると論じてきた。このような視座は、ただちに次のような問いを喚起する。すなわち、いかなるやりとりが「応答的」なものとして感受されるのか、そのやりとりを応答的たらしめている「文脈」とは何か、という問いである。

(1) 「応答」を記述する

伊藤亜沙は『手の倫理』のなかで、坂部恵の議論に依拠しながら、「ふれる」を人間的なかかわり、「さわる」を物的なかかわりとして区別し、われわれが接触経験において「ふれる」と「さわる」の微妙な差異を感じ分けている様子を描いている（伊藤 2020：3-6）。相手が人間だからといって、必ずしもかかわりが人間的であるとはかぎらず、相手が人間でないからといって、必ずしもかかわりが非人間的であるとはかぎらない、と伊藤が述べているように、あるかかわりが「さわる」として感受されるか、それとも「ふれる」として感受されるかは、そのやりとりが生じている文脈の中ではじめて決まるのであって、そうした文脈から遊離してア priori に決まっているわけではない。他者からの何気ないまなざしや呼びかけが「わたし」を壊乱するものとして侵襲的に感じられることもあれば、スピーカーから流れる機械音声に「触発」されることもありうるように、「他者の現れ」や「他者との出会い」をめぐる経験／出来事に接近していくためには、「そのかかわり／やりとりが応答的か否か」を、そのつどの文脈の中で明らかにしていく必要がある。

このように応答の成否を問うことは、日常的な相互作用をめぐる社会学的記述のなかに現象学的な問題意識を呼び込んでいくことを意味する。たとえば、先に挙げた植物状態の患者とのやりとりのように、日常的な相互作用が困難な場合においても、ある種の文脈のなかで「他者との出会い」を感受することは起こりうるし、その反対に、たとえば何気ない会話において、他者の言葉が「独り言」として感じられるときのように、日常的な相互作用が一定の秩序をもって成立していても、そこに応答的な感覚がともなわない場合もあるだろう。このように、「相互作用の成立」と「応答の成立」は同義ではなく、両者が齟齬をきたす場面は日常のいたるところに存在するのであって、こうした経験／出来事を捉えるためには、「相互作用の成立」と「応答の成立」を相互に還元できないものとして区別し、両者がどのように関連しているか(いないか)を問わなければならない⁶。

また、応答の成否を捉えるためには、個々の経験や出来事の肌理に見合ったかたちで、現象学的な観点から記述の解像度を上げていく必要がある。先の「ふれる」と「さわる」の区別で例えるなら、「さわる」と「ふれる」を経験／出来事の質に応じて使い分けるだけでなく、場合によっては、「ふれる」ということがいかなる経験／出来事なのか、その内的構造を詳らかにするような記述が求められるだろう。

これに加えて、人称的な分節化が応答的なやりとりに支えられていることから、記述における人称性もまた重要な争点となりうる。たとえば、前章で論じたような「わたし」の成立しがたさを捉えるためには、「行為主体」の存在を前提とする主語をもった人称的な記述よりも、非人称構文のような「出来事的」な記述が求められるはずである⁷。このように、ある経験／出来事をいかなる人称において記述するかが、応答をめぐる記述の重要な賭け金になると言えよう。

⁶ 「相互作用の成立」と「応答の成立」を相互に還元できないものとする、「相互作用の成立／不成立」と「応答の成立／不成立」を掛け合わせることで、①相互作用も応答も成立している、②相互作用は成立しないが、応答は成立している、③相互作用は成立するが、応答は成立しない、④相互作用も応答も成立しない、という4つのパターンが得られる。本文中の例を当てはめるなら、「植物状態の患者に会う」という経験は②、「相手の言葉が独り言のように聞こえる」という経験は③にあたるといえよう。その上で、「相互作用の成立／不成立」と「応答の成立／不成立」の関連性を考慮すると、さらなるバリエーションが生じる。たとえば、「型通りのコミュニケーションが繰り返されることによって、徐々に応答感覚がすり減っていく」ような場合、「相互作用の成立」が「応答の成立」を阻害することで、①から③への移行が生じたと言える。これに対し、「相互作用の可能性が絶たれることによって、かえって応答感覚が喚起される」ようなケース(②)は、その裏面で生じる経験／出来事と言えるかもしれない。「相互作用の成立」と「応答の成立」の区別そのものも重要な争点であるが、少なくとも、このように両者を区別することによって、「他者の現れ」や「他者との出会い」をめぐる経験／出来事をより詳しく記述できるのではないだろうか。

⁷ ここでいう「出来事的」な記述のあり方を考えるうえで、近年の中動態をめぐる議論が参考になる(國分 2017; 國分・熊谷 2020)。たとえば、中動態の概念を用いた経験的研究として、藤巻りによる発達障害児のセラピー場面の研究が挙げられる(藤巻 2020)。藤巻は、従来の心理学が自己と他者の区別を前提としてきたのに対し、自他の区別がない発達障害児の体験世界を記述するために、中動態の概念を援用している。紙幅の関係上、詳細に触れることはできないが、このように中動態の概念が多くを経験的研究において援用されるのは、われわれの経験的世界がつねに人称的に分節化されているとはかぎらないからではないだろうか。

(2) 「文脈」を記述する

上記のような応答をめぐる現象学的な記述は、「あるやりとりが応答的なものとして感受されているか否か」「応答的であるとはどういうことか」を問うものであるが、「そのやりとりが応答的なものとして感受された／感受されなかったのはなぜか」という問いに答えるものではない。先述のように、あるやりとりが応答的なものとして感受されるかどうかは、そのやりとりが生じている社会的な文脈に左右されるのであって、そうした文脈の記述なしに応答の成否を考えることはできない。このような文脈依存性を捉えるためには、応答をめぐる現象学的な記述の射程を、その背後にある社会的な文脈にまで拡張し、いかなる文脈がそのやりとりを応答的たらしめているのかを問う必要がある。

こうした文脈記述の第一歩は、応答をめぐる個々の経験／出来事が、いかなる場面／状況において生じているかを明らかにすることである。前章で綾屋を例に論じたように、体験世界の人称的な分節化や構造化は、知覚や感覚-運動レベルにおける環境のアフォーダンスによって支えられている⁸。環境と体験世界は個々の身体がもつ知覚特性や経験構造によって媒介されているが、それらは生得的に決定されているというよりも、生得的な資質と環境との相互作用のなかで形成・維持されるものであって、生活誌的・個人誌的な「前史」を内包している。また、知覚特性や経験構造は身体の内側で完結するプログラムではなく、あくまでも環境と呼応するかたちで現働化されるものであって、こうした文脈依存性を無視してしまえば、知覚特性や経験構造を物象化するような、還元論的な説明・理解に陥る可能性がある。

このような文脈記述の射程は感覚や知覚のレベルにとどまるものではなく、「状況の定義」をめぐる認知・解釈レベルでの社会的相互作用や、その背後にある制度や文化、歴史といったより広い社会的文脈に至るまで、原理的には際限なく遡行／拡張しうるだろう。応答の成否が文脈から独立してアプリアリに決まっているわけではないのと同様に、あるやりとりを応答的たらしめている文脈もあらかじめ決まっているわけではなく、あくまでも個々の経験／出来事の中ではじめて特定可能となる。したがって、こうした視座においては、応答の成否を左右する文脈を個々の経験／出来事に即して特定することが、記述上の重要な賭け金になるはずである。

このように、応答をめぐる経験／出来事の内には、絡まり合う複数の文脈が襞のように折り込まれているのであって、それらを遡行的に記述していくことは、経験や出来事がもつ襞を解きほぐし、繰り延べていくことを意味する。また、個々の経験や出来事を支えている複数の文脈は、要素論的に解体しうるものではなく、そのつど固有の仕方で

⁸ ここでいう環境とは、事物によって構成される物理的環境だけでなく、他個体によって構成される社会的な環境を含むものであるが、より基底的には、こうした「物理的／社会的」という人称的な分節化がいかんして可能かが問われうる。

結びついているものであって、一部分のみを応答の「条件」や「原因」として抽出することはできない。それゆえに、こうした文脈記述の営みは、応答をめぐる個々の経験／出来事を社会的な文脈に「還元」するものではなく、むしろ文脈の複数性や複雑性を示すことによって、特定の文脈に還元できない経験や出来事の「固有性」を顕わにするものだと言えるだろう。

6. おわりに

本稿ではこれまで、「他者の現れ」をめぐる現象学的な議論から出発し、発生論／発達論的な説明に対して、「人称」や「応答」が文脈依存的に「生成／消滅」するものであることを論じてきた。こうした視座に立つとき、「他者の現れ」や「他者との出会い」は、わたしたちの経験的現実において安定的に維持されているものではなく、そのつどの文脈に支えられてかろうじて成立するような、ある種の「あやうさ」や「不確かさ」を帯びたものとして浮上するはずである。

冒頭に述べたように、現象学はこれまで、「他者の現れ」それ自体を主題とし、その内的機制を原理的に追究してきたが、「他者の現れ」や「他者との出会い」をめぐる経験／出来事が、つねに何らかの社会的な文脈の中で生起するものである以上、その文脈性を捨象してしまえば、「他者の現れ」や「他者との出会い」がもつ「あやうさ」や「不確かさ」を決定的に捉え損なう可能性がある。

これに対し本論では、現象学的な観点から応答をめぐる経験／出来事の記述の解像度を上げていくと同時に、社会学的な観点からそれらの内に織り込まれた「文脈」へと記述の射程を拡げていくことで、こうした「あやうさ」や「不確かさ」を捉える視座を提起した。これらは経験的な記述に向けたささやかなマニフェストのようなものにすぎず、経験的な記述の射程を拡大するとともにその解像度を上げていく点で、困難な作業を予感させるものであるが、それは裏を返せば、「他者の現れ」や「他者との出会い」をめぐる個別具体的な経験／出来事を記述することそれ自体が、研究上の鉤脈になりうることを示唆しているのではないだろうか。

文献

- 綾屋紗月、2010、『つながりの作法——同じでもなく 違うでもなく』NHK 出版。
——、2013、「アフォーダンスの配置によって支えられる自己——ある自閉症スペクトラム当事者の視点より」、河野哲也編『知の生態学的転回 3 倫理——人類のアフォーダンス』東京大学出版会、155-180。
Crossley, Nick, 1996, *Intersubjectivity: The Fabric of Social Becoming*, London: Sage. (西原和久訳、2003、『間主観性と公共性——社会生成の現場』新泉社)。

- 藤巻るり、2020、『発達障害児のプレイセラピー——未分化な体験世界への共感からはじまるセラピー』創元社。
- Goffman, Erving, 1963, *Behavior in Public Places: Notes on the Social Organization of Gatherings*, London: The Free Press of Glencoe. (丸木恵祐・本名信行訳、1980、『集まりの構造——新しい日常行動論を求めて』誠信書房)。
- , 1967, *Interaction Ritual: Essays on Face-to-face Behavior*, New York: Doubleday & Co. (浅野敏夫訳、2002、『新訳版 儀礼としての相互行為』法政大学出版局)。
- 藤谷秀、2001、『あなたが「いる」ことの重み——人称の重力空間をめぐる』青木書店。
- 浜田寿美男、1999、『「私」とはなにか——ことばと身体との出会い』講談社。
- 編、1992、『〈私〉というもののなりたち——自我形成論のこころみ』ミネルヴァ書房。
- 編訳、1983、『ワロン/身体・自我・社会——子どものうけとる世界と子どもの働きかける世界』ミネルヴァ書房。
- 廣松渉・港道隆、1983、『メルロ=ポンティ』岩波書店。
- Husserl, Edmund, [1931] 1977, *Cartesianische Meditationen: Eine Einleitung in die Phänomenologie*, Hamburg: Meiner. (浜渦辰二訳、2002、『デカルト的省察』岩波書店)。
- 市川浩、[1984] 1993、『〈身〉の構造——身体論を超えて』講談社。
- 、1992、『精神としての身体』講談社。
- 伊藤亜紗、2020、『手の倫理』講談社。
- 木村大治・花村俊吉編、2021、『出会いと別れ——「あいさつ」をめぐる相互行為』ナカニシヤ出版。
- 國分功一郎、2017、『中動態の世界——意志と責任の考古学』医学書院。
- 、2019、「類似的他者——ドゥルーズ的想像力と自閉症の問題」、檜垣立哉・小泉義之・合田正人編『ドゥルーズの21世紀』河出書房新社、143-166。
- 國分功一郎・熊谷晋一郎、2020、『〈責任〉の生成——中動態と当事者研究』新曜社。
- 熊谷晋一郎、2020、『当事者研究——等身大の〈わたし〉の発見と回復』岩波書店。
- 松葉祥一、2010、『哲学的なものや政治的なもの——開かれた現象学のために』青土社。
- Mead, George Herbert, 1934, *Mind, Self and Society: from the Standpoint of a Social Behaviorist*, Chicago: University of Chicago Press. (稲葉三千男・滝沢正樹・中野収訳、1973、『現代社会学大系 第10巻 精神・自我・社会』青木書店)。
- Merleau-Ponty, Maurice, 1945, *La phénoménologie de la perception*, Paris: Gallimard. (竹内芳郎ほか訳、1967・1974、『知覚の現象学 1・2』みすず書房)。
- , 1953, *Eloge de la philosophie l'oeil et l'esprit*, Paris: Gallimard. (滝浦静雄・木田元訳、1966、『眼と精神』みすず書房)。
- , 1960, *Signes*, Paris: Gallimard. (竹内芳郎ほか訳、1969・1970、『シーニュ 1・2』みすず書房)。
- , 1988, *Merleau-Ponty à la Sorbonne, résumé de cours 1949-1952*, Grenoble: édition Cynara. (木田元・鯨岡峻訳、1993、『意識と言語の獲得——ソルボンヌ講義 1』みすず書房)。
- 宮台真司、1985、「人称図式論——範疇的行為理論の拡張」、『ソシオロギス』、9: 20-36。

- 村上靖彦、2008、『自閉症の現象学』勁草書房。
——、2014、「重力と水——レヴィナスのエロスと体が動かない人の介護」、合田正人編『顔とその彼方』知泉書館、189-212。
村瀬学、2010、『「あなた」の哲学』講談社。
西原和久、1998、『意味の社会学——現象学的社会学の冒険』弘文堂。
——、2003、『自己と社会——現象学の社会理論と「発生社会学」』新泉社。
西村ユミ、2001、『語りかける身体——看護ケアの社会学』ゆみる出版。
斎藤環、2019、「〈対話〉の中の人称」、木村敏・野家啓一編『人称をめぐる——臨床哲学の諸相』河合文化教育研究所、123-148。
坂部恵、2003、『坂部恵集 3 共存・あわいのポエジー』岩波書店。
——、1983、『「ふれる」ことの哲学——人称的世界とその根底』岩波書店。
関水徹平、2009、「社会的死の構図——現象学的社会学の観点から」、『早稲田大学大学院文学研究科紀要』、55: 105-118。
鷺田清一、1995、『人称と行為』昭和堂。
やまだようこ、2010、『ことばの前のことば——うたうコミュニケーション』新曜社。
山本史華、2006、『無私と人称——二人称生成の倫理へ』東北大学出版会。

(たかはしけんじ・法政大学)

